

so convinced of the sheer power of reason to win over any infidel—a conviction which is the driving force of the argument in the *Summa contra gentiles*.

意見

中世における諸宗教間対話

K.リーゼンフーバー

通常の見解によれば、諸宗教の間の対話は現代の宗教的状况を特徴づけるものと見なされることがあろうが、実際には、古代末期教父時代からキリスト教諸宗派の間——たとえば、アウグスティヌスが主導的な役割を果たしたカトリック教会と北アフリカのドナトゥス派との宗教会議など——だけではなく、中世全般において、異なった宗教に属する信仰者の間の積極的な協力や対話への意志が見られる。諸文化の接触は、学問に関する協力に限らず、宗教そのものを主題とする対話にも及んだ。ライムンドゥス・ルルスはアラブ人の諸学問と言語を学び、西洋各地にアラビア語学校を設立した。12世紀前半のユダヤ人、イエフダ・ハレヴィは『クザリ』において諸宗教の間の対話を描いているし、ベトルス・アベラルドゥスは、哲学と諸宗教の代表者の対話において、人間の幸福への憧憬を共通な焦点として相互理解に努め、中世末期にクザーヌスも『信仰の平和』という対話篇で諸民族・諸宗教に対話させ、理性的に理解できる真理のもとで諸宗教の統一を図る。アラブ人たちの間では、アル・キンディーは理性的に把握できる真理を通して一つの世界宗教を根拠づけることを哲学の課題と見なしている。これらの試みにおいてそれぞれの著者の信奉している宗教が最終的な規範と目標となることはそれらの哲学的努力の意義を減少させるものでもないだろう。

トマス・アキナスの根本的な態度は、人々が何を思ったかではなく、事柄の真理そのものだけが肝心であるという言葉において典型的に表れる。すなわち、トマスは開かれた客観的な態度で、また、文献的的確な知識にもとづいて古代ギリシアの哲学だけではなく、ユダヤ人哲学者のモーゼス・マイモニデスの預言論、アヴィセンナの形而上学から、たとえば存在と本質の区別、存在と知性との関係について学んでいる。ちなみに、アヴィセンナの著作は13世紀に入って間もなくパリ大学で徹底的に研究され、13世紀半ばから哲学者・神学者たちによって正確に理解され高く評価されて

いる。同様のことは、1225 年以降西洋において研究され、1260 年代から批判されることになったアヴェロエスの著作についても言える。

イスラム圏の哲学との対話において、トマス・アクィナスはその根本的な方法的立場に従って諸問題を純粋に哲学的な立場から取り上げようとし、宗教の諸問題を人間そのものに関わり理性的に理解可能な問題として扱おうとしている。この態度を可能にする前提は、自然本性的理性の認識が信仰に対して本来的な役割を果たすという理解である。つまり、2・3 世紀のユスティノスやクレメンスのロゴス・キリスト論、アンセルムスの理性的神学、アベラルドゥスのロゴス=キリストにもとづくロギカ（論理学）理解という伝統に見られるような、純粋なロゴス・理性の本来キリスト論的性格を基盤にしている。この理解はラテン中世の哲学者だけではなく、神学者、また教会と社会においても基本的に受け入れられていたので、神学も理性的学問とみなされていた。諸宗教間対話を行おうとする際には、ただ個々の哲学的命題が理性的に根拠づけられ、その著者の宗教の教義と一致しているかどうかだけでなく、対話を可能にする理性的探求そのものがそれぞれの宗教の教義にもとづいて正当なものとして承認されているのか、という問題が関わっていると思われる。具体的に言えば、アル・ファーラービーやアヴェロエスにおいては、たしかに純粋な哲学は行われるが、真理をありのままに把握するとされる哲学に、真理をイメージで語るとされる信仰の教えに対するよりも高い位置づけが与えられることによって、哲学と信仰は統一がたいかたちで対立する可能性が生じ、それゆえ、イスラム世界の中で哲学の立場が危うくされざるをえなくなったと思われる。